

◆コンクリート工の省力化・合理化と品質確保のための技術指針－生産性向上に貢献する技術として

このタイプのコンクリートを活用することで、品質を確保したうえで生産性の向上に貢献することが可能となるが、実際の工事に効果的に適用するためには留意点もあるので、是非、本書を参考に締固めを必要とする高流動コンクリートを活用することのメリットを享受して頂ければと考えます。

指針と同じ2つの標準的なタイプの例

		タイプ1	タイプ2
構造条件	鋼材の最小あき(mm)	125程度以上	60~100程度
施工方法	自由落下高さ(m)	1.5以内	1.5以内
	一層当りの打込み高さ(cm)	40~50	40~50
	打込みに伴う流動距離(m)	5以下	5以下
	バイブ挿入間隔(cm)	50~100	50~100
	締固め時間(秒)	5程度	5程度
	型枠への側圧	液圧が安全であるが不経済となる場合があるので過去の実績・資料により設定	
フレッシュ コンクリートの品質 および目標値	流動性	スランプフロー450mm	スランプフロー550mm
	材料分離抵抗性	粗骨材量比率40%以上 間隙通過速度15mm/s以上	粗骨材量比率40%以上 間隙通過速度40mm/s以上
	間隙通過性		粗骨材量比率40%以上 間隙通過速度40mm/s以上

粗骨材量比率:JSCE F702 間隙通過速度(JSCE F701 附属書1)